

# 私立 國學院大學

プログラムの名称：学生みずから発信する「自分史」作成支援  
 -- 社会のなかでの自己活用力養成プログラム

プログラム担当者：就職部長・経済学部 教授 遠藤 彰郎

キーワード

1. コンピテンシー診断 2. 「振り返り」 3. ポートフォリオ  
 4. 「自分史」 5. 社会人基礎力

## 1. 大学の概要

國學院大學は1882（明治15）年に創設された「皇典講究所」を母体としており、明治初期の極端な欧化政策に対し、我が国の歴史、民族性に基いた文化、思想、体制の確立を目指す気運の高まりを受けて創設されたものである。この趣旨は今日に受け継がれ、本学は日本文化の究明と徳性の涵養を建学の精神としている。すなわち、日本文化の本質を明らかにすることにより、日本人としての確かな自己認識を深め、異文化の長所を学びつつ、新たな日本文化の形成に寄与する人材の育成を目指すものである。

現在では文学部、法学部、経済学部、神道文化学部の4学部におよそ10,000人の学生を擁し、深い教養と専門性を兼ね備えた人材の育成を目指して、教育・研究活動を展開している。

2002（平成14）年、前学長の下に制定された「21世紀研究教育計画委員会」及び現学長の下に策定した「教育の基本方針と施策」に基づき、少子高齢化、国際化、環境問題など、新しい課題にも対応した改革を進めている。本プログラムもこの潮流を基底とする取組のひとつである。

## 2. 本プログラムの概要

國學院大學では、徳性の涵養をうたう建学の精神に基づき、全学的学生支援に取り組んでいる。独自に開発した学生支援システムK-SMAPY（Webを活用したポータルサイト）を利用することにより、役割分担を超えた支援を実現するとともに修学相談、キャリア形成支援、保護者会における人的支援を充実させてきた。さらに情報セキュリティを強化して社会的責任を果たすため、ISO27001を取得し、認証評価を通じて教職員の意識とスキル向上を図っている。

本プログラムは従来の支援による成果を分析した結果

をふまえ、コンピテンシー診断を導入して学生に「振り返り」と自己評価の機会を提供する。同時に学生の意識改革と人間的成長を促すWeb版自発的ポートフォリオの作成を推進していく。

学生は「自分史」を作り上げる作業を通して視野を広げ、社会人基礎力を育むことになる。これによって中途退学者を減らし、社会的課題であるニート・フリーター対策にも資するプログラムである。

## 3. 本プログラムの趣旨・目的

本プログラムでは、これまでに実施してきた修学支援、キャリア形成支援の評価と分析をふまえ、学生が自己理解を深め、社会との関わりにおいて必要な力を自覚するためにコンピテンシー診断を実施する。

K-SMAPYを通じて診断結果を学生へ提供し、社会で必要とされる能力とそれに対応する自分の特性に気づいてもらう。続いてその結果を起点として、学生自ら自分史を作成し、ポートフォリオとして発信する仕組みを構築する。教職員は学生が発信するポートフォリオを学生カルテとして活用し、面談を中心としたよりきめ細かな人的支援体制を整備する。

この取組は、堅牢なセキュリティに守られたデータベースに学生の自己分析結果を登録し、教職員の面談を通じて評価されるという側面を持っており、その段階で自己評価と教職員の評価とのギャップに気づくことも重要な目的である。

学生が学年進行に従って、自分を映す鏡としてこの仕組みを活用し、「振り返り」と新たな目標設定を繰り返し、自分を再認識するきっかけとなるようにしたい。それにより学生が広い視野と新たな能力の獲得に役立てることを目指している。また支援が必要な学生に着実に実践することで、中途退学を予防し、一人でも多くの学生が社会人基礎力を身につけ、人間的成長を遂げて社会で活躍できることを目的としている。

## 事例31 國學院大學

学生の学力、学修意欲、志向性が多様化してきた背景として、一般的には進学率の向上や入学試験制度の多様化があげられているが、加えて大学入学までの教育カリキュラムが受験のための対策になっていることも懸念される。こうした背景により、大学入学後、自発的な学修スタイルや実体験に基づく学修方法に戸惑う学生が多いのも事実である。

学生総体の学修における満足度を測る指標として退学率が考えられるが、退学率はここ数年、年間3%から4%の間を推移している。この状況を年間ではなく、学生の入学年度別に捉えて、入学後7～8年の経過を観察するとさらに深刻な現実突き当たる。2000（平成12）年度入学者の退学率は、2007（平成19）年3月現在15.6%であった。退学者に占める過年度生（留年または卒業延期となった学生）の割合は高く、学業との相関は明らかである（図1、図2参照）。

日常的な修学相談や保護者会における懇談会等を通じて精神的疾患による不登校や引きこもりの学生が顕在化してきたが、これらの学生には特定の教職員が個別に担当として付き、継続的な支援が施されている。

今後も大学の教職員とつながりを保つことができ、個別的な支援を受けることが保証されている。より深刻なのは、このほかに心身とも健康であるにも関わらず、無為に日々を過ごしてしまう学生が、一定数存在することである。

これらの学生の授業への出席率は40%～80%が多く、GPAは1.0～2.0である。授業への出席率60%～80%の学生も含まれているが、教員からの報告やGPAから判断すると、学修効果は上がっていないとみるべきである。これらの学生たちは、最終的に卒業できるものの、十分なキャリアプランニング、キャリア形成は実現できていない可能性がある。しかしながら、ある程度のGPAと出席率を保っているため、学業不振者として面談する修学相談の対象からは外されてきた（図3のB参照）。

また本年度実施した1,000件以上のキャリアミーティングの結果によれば、彼らには自ら進んで物事に向き合った経験が乏しく、自分のことをよく理解していないという共通点が見出された。そのため将来の進路についても真剣に考えたことがなく、大学生活に目的を見出せないまま日常を過ごしているケースが多い。

正課教育のターゲットが比較的学修意欲の高い学生（図3のA層）におかれていることもあり、同B層の学生は大学との関係が希薄な状況にあった。彼らは放置しておけばニート、フリーターとして社会へ出てゆく危険をはらんでおり、たとえ就職しても早期に離職する可能性が高いと思われる。

本プログラムはこのような現状を背景とし、これらの学生層を中心に、意識改革を促して自立する支援を行き渡らせることをコンセプトとしている。

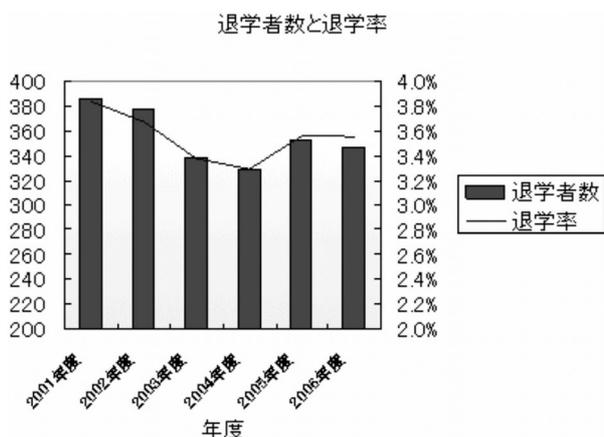


図1 退学者数と退学率

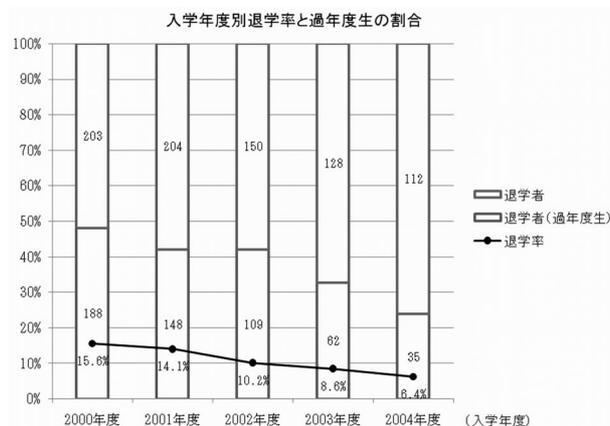


図2 入学年度別退学率と過年度生の割合

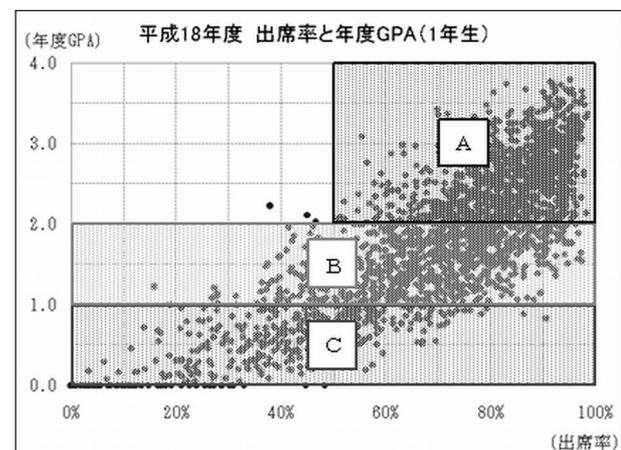


図3 2006（平成18）年度 出席率と年度GPA

- A：正課教育の対象範囲
- B：新たな支援が必要な範囲
- C：修学相談の対象範囲

#### 4. 本プログラムの独自性(工夫されている内容)

##### (1) コンピテンシー診断

入学時学力診断のほかに、コンピテンシー診断を導入する。これは従来行ってきた適性検査が性格、価値観といったどちらかといえば先天的特性を測るのに対して、「能力・興味・関心・こだわり」といった後天的に獲得された行動や思考の特性にまで踏み込んだ検査を行い、学生に自分の強みと弱みを把握させ、自己理解の徹底を促すものである。

この行動特性の検査は学生が実社会に出たときに、自己のどの特性が役に立ち、何が不足なのかを自分の目で見極めるために利用し、どのようなスキルを獲得して就職につなげていくかを学生自身に考えさせるものである。

##### (i) コンピテンシーの例

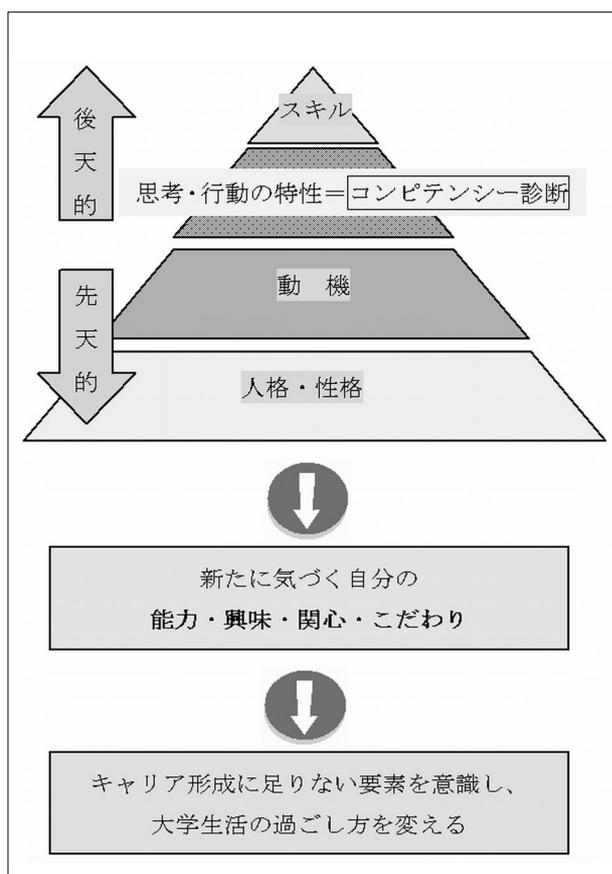


図4 コンピテンシー診断の概念図

##### (ii) コンピテンシー診断の概念図

この診断結果をK-SMAPYに記録し、次に述べる学生の自発的ポートフォリオ作成の基礎資料とする。その後も自己の社会的能力と特性を継続的に把握して成長を実感するため、毎年診断を実施する。その結果はK-SMAPYに蓄積し、学生へフィードバックする。

この取組により「自己の適性に合った仕事」に就く可能性を広げ、ミスマッチによる安易な離職を防ぐことにつなげていく。

入学をゴールだと思ってしまった学生は、就職活動においても就職と入社を最終目標と捉えてしまうことが多い。コンピテンシー診断は初年次から将来のキャリア形成に向けて主体的な活動を開始する動機付けであり、学生生活に具体的な目的を見出し、就職活動においては就職後の人生を視野に入れたキャリアデザインを意識してもらうことを目指している。

##### (2) 学生ポートフォリオ

コンピテンシー診断の結果をK-SMAPYに取り込み、それを起点として学生ポートフォリオの作成を推進する。学生はコンピテンシー診断結果に対する自分なりの感想と評価を入力するとともに、今までの自分を振り返る作業を行い、自己評価を実施する。

大学からは入学時学力診断の結果をはじめ、学生の自己評価を促すための情報を提供する。学年進行に伴って授業への出席率、GPAなど大学から提供する情報を増やしていく。

学生は「振り返り」と自己評価を繰り返し、ポートフォリオを教職員に積極的に評価してもらうを通じて、社会のなかで自分を生かす道を模索する。

表1 大学から学生ポートフォリオに提供する情報

①ポートフォリオ作成の趣旨説明とメッセージ
②自己評価のためのデータ
・コンピテンシー診断結果
・入学時学力診断結果
③自分史を作成するためのデータ
・履修情報
・GPA
・授業への出席情報と参加度
・提出レポートの履歴
・受講している教職、資格課程
・各種資格、認定試験の情報
・学内褒賞
・課外活動の記録

表2 学生が入力する情報

<p>①自己評価のための項目</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・コンピテンシー診断結果に対する評価と感想</li> <li>・過去にがんばって取組んだこと (学業、課外活動、ボランティア、趣味、スポーツ、旅行など)</li> <li>・大学生活においてこれからやりたいこと、抱負</li> </ul> <p>②キャリア形成のための項目</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・履修計画、卒業までの学修計画</li> <li>・印象に残った授業</li> <li>・将来就きたい職業</li> <li>・エントリーシート</li> <li>・その他大学生活において記録しておきたいこと</li> </ul>
---

本学が導入する学生ポートフォリオは学生の主体的、自発的な作成に主眼をおいているため、学生の「大学からやらされている」という意識を取り除きつつ、多くの学生が参加できることが肝要である。本年の入学時学力診断の結果は100%の学生がK-SMAPYで確認しており、診断結果通知との組み合わせは利用率を上げるためには有効だと思われる。

この仕組みの運用には教務部、学生部、就職部の教職員がすべて関わり、ポートフォリオを学生カルテとして活用し、多様化する学生の「個」と「質」に対して直接働きかける学生支援を実現していく。この仕組みをK-SMAPYを通じて運用していくことで多くの学生の参加が期待でき、教員もキャリア形成支援の最前線に参画することになる。

正課教育におけるキャリア形成支援は比較的学修意欲の高い学生が対象となっていたが、この仕組みを導入することによって不本意入学者や修学意欲の低い学生にも、より効果的な動機付けを行うことができる。

さらにISO27001の基準に則ったセキュリティ運用を行って継続的に学生の信頼を獲得していく。この取組はITを活用して支援を必要としている学生を迅速かつ正確に把握し、的確な支援を行う点が、運用体制も含めて大いに他大学の参考になるとと思われる。

## 5 . 本プログラムの有効性（効果）

「学生みずから発信する『自分史』作成支援」によって期待できる効果は、以下の3点である。

第一はコンピテンシー診断によって、学生に自分の強みと弱みを把握させ、徹底した自己理解の上にキャ

リア形成を行うことができる点である。コンピテンシー診断では、学生自身が今まで気づかなかった能力や適性を発見することが可能である。例えば本学の学生は数学が苦手だと言われており、そのような潜在意識をもつ学生は少なくない。ある授業で数学が苦手だと公言していた学生が、数的処理に関する課題に取り組んだ際、非常に高い能力を示したことがあった。このような気づきと自己評価はその後の学生の成長に大きく寄与するものである。

正課教育においては全学共通領域や副専攻によって幅広い選択肢を保証しており、学生の新たな気づきによる志向性の変化や拡大、さらには「やり直し」にも十分対応することができるであろう。

第二は教職員が、学生ポートフォリオを面談等に活用することで、学生の特性を理解し、その自立と成長を促す支援ができるようになることである。自己評価と教職員の評価とのギャップに気づいた学生は、自己の特性をより客観的に評価できるようになる。これは職業を選択する際に自分を生かす視点を取り入れることを可能にし、結果として早期離職の減少につながるものである。

第三は、正課における導入教育と併せて実施していくことにより、約3割を占める不本意入学者や修学意欲の低い学生に大学生活の意義を提示できることである。不本意入学者は、自分の居場所すら確保できていないことが多く、大学生活の目的も見失いがちである。できるだけ早い時期に自己分析をする機会を提供し、自分を生かす道を模索する仕掛けをつくることで、漫然と受けていた授業に初めて価値を見出すことができる。

この取組全体を通じて、前へ踏み出す力、自ら計画を立て実行する力、相手の意見を聴き、自己を表現するコミュニケーション能力など、複雑・多様化した社会で生きていくための「社会人基礎力」を育む効果が期待できる。またこれらに付随する副次的な効果として、中途退学や留年（卒業延期）となる学生を減らしていくことを期待している。

## 6 . 本プログラムの改善・評価

本取組の評価は、従来行ってきた支援と同様、学生のポートフォリオ活用度、教職員の参加度、ポートフォリオ支援に携わる部署の自己評価を通じて総合的に評価する。そのほか学生へのアンケートを繰り返し行い、意見や要望を聴く。また他大学や学会等に事例紹



## 事例31 國學院大學

も機能する。また、学生・教職員間、さらには、学生同士のコミュニケーションを促進するため、全学的なコミュニケーションツールとして利用されているK-SMAPYにSNSの機能を導入し、Web上に授業以外のコミュニティを提供する計画である（図7参照）。

2009（平成21）年度以降は引き続き取組を実施するとともに、成果の検証を行い、仕組みと運用の見直しを実施する。

4年の補助期間が終了した後は初年次の新生が卒業し、いよいよ実社会との接続における効果を測ることができるであろう。その成果をふまえてさらに効果的な運用を続けていく所存である。

The screenshot shows a web interface for a community page. At the top, the title is 'コミュニティ(案)'. Below it, there are navigation tabs: 'ポートフォリオ', 'コミュニティ', 'ブログ', 'メッセージ', and '足跡'. A search bar with the text 'キーワード検索:' and a '検索' button is present. The main content area is divided into sections: 'お知らせ' (Notice) with dates 12/1 and 12/3, 'コミュニティ新着情報' (Community New Information) with a date 11/25, and a '時間割とスケジュール' (Timetable and Schedule) table. The table has columns for dates from 12/2 to 12/8 and rows for days of the week (日, 月, 火, 水, 木, 金, 土). On the left side, there is a user profile for '山田花子 様' with a profile picture and a 'プロフィール' link. Below that are links for 'マイキャンパス一覧', 'コミュニティー一覧', 'アドレス帳', and 'マイページカスタマイズ'.

図7 コミュニティ（案）

### 選 定 理 由

國學院大学では、長年にわたってITシステムを活用した学生支援の取組が行われてきており、独自に開発されたWeb支援システムは、大きな成果を上げています。

また、今回申請のあった「学生みずから発信する『自分史』作成支援」の取組は、修学意欲の啓発、自己理解の伴うキャリア形成、教員の学生支援の精緻化などを目的としたものであり、学生の自己診断、学生ポートフォリオの作成等によって、学生支援をさらに展開させようとする有意義な試みです。

特に、不本意入学者や修学意欲の低い学生の支援を行う上で、この取組は、他の大学等の参考となる優れた取組であると言えます。